

「後斎藤系図(四貞下)」は、一五六〇(永禄二)年の「六角義賢書状」を骨格にして作成した。永禄三年といつ義龍が父道三を滅ぼした弘治一年から六年後であり、それに道三に逐われた頼芸が情報源であり、信憑性が高い。さらに、「江濃記」などから、道三の父は、山城西岡出身で、長井家へ仕官し、長井豊後守と名乗り、主君藤左衛門を支えながら、不和となり、豊後守は病死。その息子は山城守利政と名乗り、藤左衛門を討ち取り、やがて斎藤を名乗り、美濃国を知行し、入道して道三と号した、とある。即ち、西村姓から長井姓を名乗るまでは、父親左衛門尉で、それを継いだ長井新九郎規秀が、守護代的立場の斎藤姓を名乗るに至り、守護土岐氏に代わって、政治の実権を握つて、国盗りを果たしたのである。

一五三三(天文二)年の龍徳寺冤禁制きんせきじでは、藤原規秀が先に、その後左衛門尉(長井藤左衛門尉)が連署していく、一人が頼芸政権内の重臣であったことが分かる。しかし、後に署名した藤左衛門尉が少し身分が上で、規秀にとつて藤左衛門尉は田の上の瘤的存在であり、やがて、規秀は、藤左衛門尉を殺害し

頼芸政権の実権を一人掌握する事になる。

一五二七(大永七)年の一〇代守護頼武(政頼)を追放し、その弟頼芸を一一代守護にしたのは、父の豊後守と息子新九郎規秀(利政、道三)の父子が結託して行つたことかもしれない。

道三の誕生年は、没年の六三歳から逆算して一四九四(明応二)年説(森田忠親氏)と一五〇四(永正元)年説(「美濃国諸田記」)がある。いじでは、明応三年説とする。

美濃國主となるも 不安定

大永七年、一〇代守護土岐頼武を逐い、自分を信任するその弟頼芸を一代守護として、その下で政権を掌握した規秀（道三）であったが、国外の各方面からの攻勢や国内の反対勢力との戦いもあり、その政権は安定したものではなかった。

①美濃を逐われた頼武（政頼）は、越前の朝倉孝景によつて、朝倉氏及び近江の六角氏の支援を受けて、失地回復を図り、美濃へ攻め入つた。結果としては、一五三九（天文八）年、山県郡大桑に入った頼純（頼武の息子）と和議を結んでいる。

②一五四一（天文二）年、左近大夫利政と名乗つていた道三

は、主君頼芸と戦い、頼芸を尾張織田氏の許へ出奔させたが、天文一三年、織田信秀は朝倉氏と組んで、美濃へ攻め入つた。朝倉軍は、徳山氏と連合し、赤坂で道三軍を打ち破つてゐる。

③天文一七年八月、織田信秀は、西美濃へ侵攻したが、道三軍に敗退した。天文一八年、美濃攻略に手を焼いた信秀は、道三と講和し、信長の正室に道三の娘帰蝶を迎えた。帰蝶の母は、可児郡の明智氏から嫁いでいた小見の方であつた。これによつて、道三の国盗り政権は、漸く安定を見た。

加納（御園）楽市場の 設定

み

その

道三は、天文四年には、斎藤利永が築城した稻葉山城を改修して居城とするとともに、城下井口の城下町経営を行つた。本町・大桑町などは道三時代の町名と見られる。城郭の南門前の加納（御園）の淨土真宗淨和坊（のち円徳寺）の寺内に、楽市場が形成され、大変な繁盛をしていた。楽市場に入れば、旧来の主従関係や借金主から無縁地となることから、流入者たちが増えていた。この楽市場は、道三時代に形成された、と見られてゐる。なお、楽市場の位置については、近年、檣森神社付近説が出でてゐる。

一五六七（永禄一〇）年九月、信長は、岐阜入城を果たしたとき、この楽市場の繁盛に日目を付け、禁制を発行して保護するとともに、城下町経営に活用しようとした。翌年に、信長は、樂市樂座令を発して、商人たちの組合特權の解体を図るが、城下町經營等に必要な材木商人などは除外してゐる。

尾張富田で信長と会見

道三は、一五五三(天文二二)年四月、尾張国富田で、婿の信長と会見をしてくる。会見の年は、天文一八年説もある。当時信長は、一〇歳となつてゐて、その風采と活動から、「たわけ」と評されていたが、道三はやうではない、といひ、実際に対面あることにした。対面場の聖徳寺に入る前の信長一行の行進ぶりを、密かにうかがつた。信長の出で立ちは、髪は茶筅鬚に

萌葱の平打ちで、ゆかたの袖をはずし、太刀と脇差しの柄には

荒縄を巻いていた。腰ひもには、燧袋と七、八個の瓢箪をぶらさげ、虎皮と豹皮とでつくつた半袴であつた。しかし、七、八〇〇人の供の衆には、間に鉄砲五〇〇挺を揃え、他に朱塗りの三間長槍を持たせていた。野武士のような風采は、戦時に供えたものであつて、笑いの対象であつたが、鉄砲隊や長槍隊は驚嘆するものであつた。

道三の正室小見の方の親族であった若き長山城主明智光秀は、おやじく、広い見識を持ち政治力豊かな道三に近づき、多くのことを学んだしたものと見られる。のちに、光秀が越前に流浪したとき、鉄砲指南役として、朝倉氏に仕宦しているのは、道三の指導があつたからであろう。

伊勢神宮の神宮文庫に、「斎藤山城守五十ヶ条」といつ兵法書が伝来してくる(横山住雄著『斎藤道三』)。その兵法は、道三が書いたところより、道三の戦いぶりから、その兵法をまとめたものとみた方が良いと言われている。その兵法の極意としては、「武略・智略・計策が大事」とし、道三が数々の戦いに勝ち抜いた経験を基にしてくる。

さうに、信長は、寺に入ると、髪を結い直し、身なりを整えた若侍として、会見に臨んだ。対面場に入った信長は、柱にもたれたままであった。やがて現れた道三に、道三の家臣が「山城守ですぞ」と呼びかけると、信長は、「であるか」と答へ、漸く道三の招待に御礼を述べ、座つて杯をかわした。歓談の後、「ま

た会いましょつ」と云つて、会見を終え、散会した。美濃への帰途、猪子兵介が、道三に「何と云つても信長はたわけですね」と言つたら、道三は、「山城の子たちは、たわけの門に馬をつなぎ従つゝとは間違ひな」こと述べた。以後、道三の周囲の人達は、信長のことを「たわけ」と云わなくなつた。

息子義龍と戦い戦死

道三の反対勢力には、義龍に、「育ての親道三は、やがて、土岐（頼芸）の血をひいてしるお前を殺し、自分の血筋の弟たちを跡継ぎにあるであらう」と讒言する者がいたに違いない。

主君や上役を次々倒して国盗りをした道三は、我が子として育てた義龍と戦い死んだ。策に長けたが、策に溺れて死んだ感がする。主君頼芸の妾深芳野が受胎している身を承知で譲り受け、産まれた子を我が子とし、さうに後継者としていた。義龍が、土岐家の血筋を引いており、土岐氏の支援も期待でき、安定政権が樹立できると判断したものと思われる。しかし、それまで、道三がしてきた行跡が悪く、土岐一族や旧斎藤や長井などから疑惑の目で見られていたのであらう。

一五五五（弘治元）年一一月、稻葉山城主義龍は、第一人を城に呼んで殺害し、父道三と義絶した。翌弘治二年四月、道三と義龍の父子は、長良川で合戦をした。義龍方には一万七五〇〇人、道三方には一七〇〇余人が集まつた。美濃の武将たちの多くは、既に世代交代していた義龍側に集まつたのである。多勢に少勢、道三は敗死した。

勝つた義龍は、美濃一国をまとめ、幕府の相伴衆となるも、五年後の永禄四年急死した。享年三三歳であった。



斎藤道三画像 常在寺蔵



斎藤義龍画像 常在寺蔵

報道に見る斎藤道三

道三関係記事は、一九七三（昭和四八）年に、NHK大河ドラマ「国盗り物語」が、美濃・岐阜県を舞台に道三が活躍する内容であったので、その前年から、道三の生涯やゆかりの地、関係イベントの記事が多く出た。一九七二（昭和四七）年九月七日

の岐阜新聞記事は、「国盗り」ブームで、観光客誘致作戦が激化したことの記事である。同年一一月三日は、「岐阜県の歴史展」が、岐阜市で開催され、その中に「道三の遺言状」があったので、大人気となつた。

富田の聖徳寺 道三・信長会見の寺

顛部七門徒らの歓迎を受けた親鸞だが、これを辞す際には、直弟子「閑善」を残留させている。関東を立つ京都を目指す親鸞が、国府津（小田原市）に滞在

した時、弟子入りした逸材などが「聖徳寺」だ。当初、大浦に伽藍が建造されたが、やがて木曾川の洪水で流失。富田村（今宮市尾西）に再建され、三ツ矢村（羽島市足近町）

閑善が拠点として創建したのが「富田の聖徳寺」だ。最初、48年間、当地に生き、師への約束を果たした。濃尾の真宗に多大な貢献をしたといえる。

島市三ツ柳へと変遷を重ねていている。

『富田の聖徳寺』は、織田信長と斎藤道三が初会見したお寺として知られている。道三は娘を信長に嫁

がせるのを機に、婚禮を観察しようとする。「うつけ者」のうわさ通り、信長は

さんばら姿で来るが、食見正装で現れる。道三は「無

意ながら、わが息子は信長にならう」と嘆く、という

あの逸話の舞台になった寺



西方寺の案内石柱と親鸞が通った鎌倉街道(境川左岸)



親鸞が立ち寄った西方寺=いづれも羽島市足近町

院だ。院だ。

2015年(平成27年)3月22日 岐阜新聞掲載